

「共に生きる社会」実現へのスポーツを通じた取組について

（障がい者と健常者の壁を越えたスポーツの浸透）

1 はじめに

今年度は、リオパラリンピックが開催された年であり、また、岩手県は希望郷いわて大会（全国障害者スポーツ大会）の会場地となり身近な場面で障がい者スポーツが注目された年であった。

2 これまでの障がい者スポーツの取組

これまでの障がい者スポーツは、障がい者同士が競うという内容や、健常者と一緒であった場合でもハンディキャップを設定したうえで競うものが主であったと考えられ、障がい者と健常者のスポーツにおける状況はバリアフリーとは言い難い現状となっている。

また、成人の週 1 日以上スポーツ実施率は、障がい者 18.2% 一般 47.5%（H25 文部科学省資料）という報告もあり、障がいの有無に関わらず、スポーツ・レクリエーション活動を共に楽しむ環境づくりが課題となっている。

3 一関市での試み（障がい者と健常者のスポーツにおける「新しい形での融合」）

今年度、本県で希望郷いわて国体・希望郷いわて大会が開催されるのを機に、当市では障がい者と健常者が同じ競技ルールの下で競い合うという、**競技としての「新しい形での融合」**を意識した取り組みとして「ふれあいスポーツ交流会」を開催し、好評であった。

【参考】

希望郷いわて国体・希望郷いわて大会記念「ふれあいスポーツ交流会」実施内容

- 1 実施日時： 平成 28 年 7 月 16 日（土） 9：30～12：30
- 2 実施会場： サン・アビリティーズ一関 及び 一関武道館
- 3 実施競技：

- （1）室内ペタンク 76 人
- （2）スポーツ吹矢 54 人

4 競技参加者

障がい者 = 96 人

健常者 = 34 人

関係スタッフ = 80 人

（合計）= 210 人



4 今後の障がい者と健常者のスポーツにおける「新しい形での融合」の在り方について

「スポーツを通じた地域振興」という観点からも、障がい者と健常者が一つのルールの下で対等の立場で競い合うという、障がいの壁を越えた競技としての融合とスポーツの素晴らしさを、今後、希望郷いわて国体・希望郷いわて大会のレガシー（遺産）として岩手県から発信し、浸透させることは意味のあることだと考える。

【参考】：考えられる競技スポーツ

・スポーツ吹き矢 ・室内ペタンク ・卓球バレー ・フライングディスク・ボッチャ ・・・・

岩手日日新聞：平成 28 年 7 月 17 日（日）

デモスポ競技で共に汗 健常者と障害者 ふれあい交流会

希望郷
国体
いわて
16

本県で10月に開催される希望郷いわて国体・希望郷いわて大会を記念した「ふれあいスポーツ交流会」は16日、一関市三関のサン・アビリティーズ一関と一関武道館で開かれた。健常者と障害者が一緒に運動を楽しもうと初めて企画され、小学生からお年寄りまでが心地よい汗を流した。

障害の有無にかかわらず、互いに尊重し合う社会をつくることを目的に、市と希望郷いわて国体・希望郷いわて大会実行委員会、市社会福祉協議会、市体育協会、市身体障害者福祉協議会が主催。市民や関係者約210人が参加した。

開会式で同実行委員会長の勝部修市長は「健常者と障害者が同じルールで楽しむことは全国的にも珍しく、一関から情報発信したい。スポーツに関

和気あいあいとした雰囲気の中、ペタンクを楽しむ参加者



心を高められるような一日になることを願う」とあいさつ。市社協の坂本紀夫会長、市体協の佐山昭助会長と共に始球式と始矢式を行った。

参加者は国体デモンストレーションスポーツで9月に市内で開催されるスポーツ吹き矢と北上市で実施されるペタンクに挑戦した。このうち目標球を目標けてボールを投げるペタンクでは、参加者が3人一組になって対戦。和気あいあいとした雰囲気の中、投げたボールが目標

球に近づくたびに拍手や歓声が湧いた。対戦後には握手をして健闘をたたえ合い、交流の輪を広げた。市内の就労継続支援事業所を利用している毛利太朗さん（22）は「いろいろな人と触れ合えた。簡単にできるスポーツなので広まってほしい」と笑顔で語った。親子で参加した一関市東山町長坂の主婦村上直美さん（36）は「ボールを投げるときの力加減が難しかったけれど、とても楽しかった」と話し、長女楓果さん（東山小6年）は「吹き矢では的に全部刺さってうれしかった」と目を輝かせた。

会場では参加者全員で「わんこダンス」を踊って国体機運を高めたほか、餅の振る舞いや市内の福祉作業所などによるパンなどの販売もあり、にぎわいを見せた。